

釋尊の宗教精神

大 森 禪 戒

衆聖點記說（歷代三寶記第十一卷、善見律毘婆沙の條下參照）に依れば、本年は大聖釋迦牟尼世尊が藍毘尼園に降誕せられて、恰も二千五百年に相當するといふ。固より佛誕年代に就ては學界に尙多くの異論があり、容易に決し難いやうであるが、比較的信じ得る右の傳説に従つて我々佛教徒が千載一遇の此の期を記念し、一は以て過去の足跡を顧み他は以て將來への發展に資するは大いに意義あることと思ふ。元來宗教は教祖を去るに隨つて漸次其の根本義を忘れ或は末節に奔り或は邪道に踏込むことすら存するのである。茲に於て我々はよき機會を捉へて脚下を照顧し、教祖の根本精神に立ち歸らねばならないであらう。併し宗教は又固有の回顧主義が却つて禍し遂に時代と其の歩みを共にし得ざる現象を伴ひ易いものである。されば其の教義信條乃至制度は折に觸れ時に隨つて文化的刷新を必要とするのである。故に我々は傳統を通して輝ける釋尊の宗教的精神を把握し、以て是を時代に生かさねばならないと思ふ。我々が釋尊を知らんと欲せば古くは阿含・律本乃至佛傳に依るの外はないであらう。併し是等とても決してその儘を傳へたものではないから、最後はかかる文献の批判的研究による推論に俟たねばならない。茲に於てこれらの文献の内に含まるる内面的意

義を捉へて行く必要があらう。この目的を果すに力を與ふるものは實に大衆部系統より般若の濾過を経て發達したる大乘佛教である。蓋し大乘佛教は釋尊の眞意を深化し廓大し且克明にしたものであるからである。却説自分は今より我が眼に映じたる釋尊の宗教に就て其の特質を少しく述べて見たいと思ふ。

(一) 釋尊の宗教は人間本位の宗教である。基督教本位の宗教觀念に慣らされたものは宗教といへば必らず神を豫想する。然るに釋尊は基督教の如き婆羅門の創造神を捨て超經驗的なる最高神を認められなかつたのである。固より釋尊はかかる神を否定せんが爲に否定されたのではなく、宗教の根本的立場に立脚してかくの如き形而上學的思辨を避けられたが爲である。釋尊に於ける現實の問題は神の有無ではなくして自己の解脱衆生の救済にあつたのである。頭燃を救ふ底の熱烈なる宗教的要求の前には太子の位も恩愛の契りも最早や問題ではなかつたのである。世間的價値の一切を捨てて一介の沙門となられた釋尊は尙他を頼りとして或は二仙を訪ひ或は苦行に身を投ぜられたが併し他に求むるあらゆる試みは何等の果實をも結ばなかつたのである。茲に於てか「正覺を成ぜずんば此座を起たず」(過去現在因果經卷三)といふ強き意志を以て菩提樹下に端坐せられたのである。生命を投げ捨てての努力は遂に報ひられて釋尊は類稀れなる覺者となられたのである。そこには神の力による何もなかつたのである。西歐の學者の中には這箇の消息を捉へて佛教は宗教にあらずとさへ言ふ者もあつた。併し佛教はそれらの意見にも拘らず民族を超えたる世界的宗教としての實蹟を如實に示してゐるのである。蓋し宗教の定義が存して然る後に宗教があるのではなく宗教はそれらの定義の如何に拘らず生きた事實であるからである。佛教より言へば神は一個の手段に外ならないのである。何となれば我等の目指す

ところは現實の苦を正しく認識して是より解脱するにあるのである。換言すれば自由にして自主なる人格を完成するにあるのである。この目的以外のものは悉く手段である。手段は目的を實現したる後には用不着である。かの四法印や四聖諦の教説に於て神の觀念が挿入せらるべき餘地は更にないのである。されば佛陀は遊行經等に於て自己を燈明とし、自己を歸依せよと教へられてゐるのである。自己を依據として努力策勵するところに眞の尊さが存するのである。釋尊か藍毘尼園に降誕せらるるや、東方に向つて歩むこと七歩にして、天上天下唯我獨尊（長阿含大本經天上天下唯我爲尊）と叫ばれたといふ。この言、固より誇張に外ならないが併し深く其の内面的意義を探るならば實に佛教の本質を道破して餘りあるものと言はねばならない。佛教は常一主宰の神によらずして自己の本面目を引出さんとする所に根本的立場を持つてゐるのである。天上天下唯我獨尊は單に釋尊のみの絶叫ではない。廣く我々も天上天下唯我獨尊である。即ちこれこそ人間の尊嚴性に對する自覺である。大乘佛教に到れば佛性といひ如來藏といふ。この佛性や如來藏も現實に於ては直ちに顯現されてゐないのである。所謂客塵煩惱の爲に蔽はれてゐるのであるから、茲に修行が必要となるのである。自己を信ぜよといつてもその自己は決して婆羅門教の如き我でも基督教の如き靈魂でもないのである。所謂眞實の自己は内在的理想態であつて決して實體ではないのである。我執我欲を離れた所にのみ初めて光り輝くものである。されば道元禪師は現成公案の卷に於て「佛法をならふといふは自己をならふなり。自己をならふといふは自己をわするるなり」と述べらるゝ所正に佛陀の本旨に合當するものである。故に釋尊の宗教は我々を天上に引上げんとするものではなく、天上の神を地上に引下げんとするにあるのである。神を本位とする宗教にあらずして人間を本位とする宗教であ

る。

(二) 釋尊の宗教は架空の論議を斥けて、身證體驗を重視する自覺の宗教である。理論を以て始終するものは哲學である。哲學は尙我々の意識を全體的に統一するものではない。最深最大の統一は獨り宗教あるのみである。

蓋し宗教は人間の生命そのものに根ざす根本的要求であるからである。釋尊がかの形而上學的質問に對して常に無言の答をされた所以も亦茲に存するのである。群盲摸象に類する論議は要するに戲論であつて決して人をして解脱に導くものではないのである。我々の頭は今將に燃えんとしてゐる。結論を見出すことの出來ないやうな迂遠な理論の遊戲をなしてゐる時期ではない。行道は須く頭燃を救ふが如くであらねばならないのである。茲に身證體驗の重要性が存する。蓋し體驗とはものを全體的に且内面的に捉へることである。佛陀の宗教は教權や信條に基く宗教ではなくして直ちに宗教意識の自覺に訴ふる體驗の宗教である。而してその自覺に達するには禪定が實に根本をなすものである。オルデンベルグも言つてゐるやうに他の宗教に取つて祈禱である所のものは佛教に取つては禪定である。故に禪定は佛教の修行徳目を一貫する生命である。釋尊が成道せられたのも樹下靜觀の禪定によつたのである。禪定は一面我欲を制すると共に他面無限の生命活動に赴く原動力である。我欲を克服することは生命の當體を否定することではない。より高き價值の世界を創造することである。眞の人格を體現することである。釋尊の宗教が若し理論の上に築かれてゐたならばよりよき理論が出ることによつて滅されるであらう。併し身證體驗に基く宗教は恰も大山に風吹くが如く微動もしないのである。我が禪門の不立文字は實に宗教の本義を道破したものである。文

文字は概念である。概念はものを局限化する限り、相対的である。宗教の聖なる価値は絶対である。依文解義の教家を斥けて正傳の佛法を擧揚された宗祖は實に偉大である。隨聞記第五に「しかあれば學人は祇管打坐して他を管することなかれ。佛祖の道は只坐禪なり。他事に順すべからず」とあるやうに坐禪こそ佛法の生命である。坐禪によつて體現された人格こそ限りなき力である。心といふが如きは未だ抽象的である。身に具體化して初めて生きてくるのである。瑩山禪師が「直指單傳道擧體說話」と示されたことは實にその謂である。まことに體驗なき宗教は空虚である。自覺なき宗教は妄想である。

(三) 釋尊の宗教は實質を重んじそれへの努力策勵を高調する力の宗教である。釋尊は形式的なる婆羅門の祭祀や一般宗教家の苦行を捨てて自らの力を信じて遂に成道せられたのである。されば理想實現に役立たざる徒勞は一切捨て、顧られなかつたのである。釋尊は伽耶河に水浴せる婆羅門を見て其の形式的なる行持を嗤ひ心を清むるに如かずと教へられたといふ。法句經百二に「雖多誦經不裸何益、解一法句一行可得道」とあり、又百四十一には「雖解剪髮被服草衣沐浴踞石奈癡結何」とある。蓋し釋尊は量よりも質を。形式よりも内容を重要視せられたのである。

道元禪師が一個半個を接得すべく越前の山中に入られた所以も亦茲に存するのである。形式は内容あつての形式である内容なき形式は無價值である。内容を重んじ質を捉へられた釋尊はそれだけ努力精進を高調せられたのである。釋尊は自ら努力論者であると言はれたといふ。實に放逸は死の徑であり。不放逸は不死の徑である。努力なき處に正當なる結實はない。釋尊の成道も努力の結果である。釋尊在世當時は無因無縁を主張する徒や、五欲の享樂に耽溺する人々が

餘りに多かつた、釋尊は彼等に對して努力論者たるの標幟を高く掲げられたのである。されば八正道に於ても正精進あり、六波羅蜜にも精進波羅蜜が存して他の道行に力を與へてゐるのである。我々は一面自己を信ずると共に他面自己を顧なければならぬ。客塵煩惱に蔽はるる自己を深く返照して眞實の自己を呼出すには不惜身命の精進が肝要である。釋尊に於ける宗教の出發點は現實の自己反省に存したのである。かの四聖諦の如きも亦現實の考察に初まつてゐるのである。緣起説の如きも亦然りである。如何にして現實の苦が存し、又如何にしてその苦を滅するかの探究がその中心をなすのである。苦滅の涅槃も現實の自己反省なくしてはあり得ないのである。而して涅槃も死後に求めらるべきではない現實に是を實現してこそ初めて價值あるものである。釋尊が二仙の説を捨てられた所以も亦茲にあると言はねばならない。道元禪師が精進を重んじ現世に於ける得達を強調せられた所正に釋尊の眞意に契當するものである。

上來釋尊の宗教に於ける特質を説いたが擧げ來らば更に加上し得るであらう。我が禪門が佛心宗と呼ばれ佛法の總府といはれるだけに釋尊の本旨を最も多分に捉へてゐると思ふ。我々は兩者相通する本質を把握して是を現代に生かし更に進んでは世界にその限りなき福音を傳ふるの覺悟を持たねばならない。我等の使命や實に重且大である。今や釋尊降誕二千五百年の嘉辰を迎ふるに當り、我等はこの重大使命を果すべく不惜身命の努力を拂ひたいと念願してやまない次第である。